

『おじいさんの椅子の歴史の すべて』を読む

山内 まどか

1840年に、ホーソーンはアメリカの歴史について3冊の短い子ども本の続き物を書いた。『おじいさんの椅子』、『有名な昔の人々』、『自由の木』だ。それらは翌年出版された。10年後、『緋文字』の成功の後、それらは『歴史と伝記からとられた真実の物語』のなかの『伝記物語』と一緒に再発行された。3つの歴史的作品はそれから『おじいさんの椅子の歴史のすべて』と題された。

ホーソーンはアメリカの歴史を他の小説において取り入れるため、子ども向けの歴史の再話はおとな向けの歴史の再話に比較された。一番最近では、ニーナ・ベイムとマイケル・コラカーシオがホーソーン作品と初期の短編における道徳の歴史の役割の考察において歴史を含ませた。

しかし歴史の使用の考察はさておき、ホーソーン小説の批評的文献は『歴史のすべて』を無視し続ける。カルヴィン・アール・ショアラの『ナサニエル・ホーソーンの子供文学』という未出版の博士論文(1949)はその話題を最も完全に扱う。しかし最近の10年間においてはほとんど加えられていない。子ども向けの歴史物語はホーソーン読者にいまだ提供するものが多い。これらの歴史物語において、ホーソーンは初めて現実と空想が隔合する世界の真実の位置を確認し理解した。従ってまさに子どもの本の執筆が彼が日

常の現実と個人的な歴史から離れるのを可能にした。

『おじいさんの椅子』、『有名な昔の人々』、『自由の木』において、ホーソーンはおじいさんによって語られて孫であるロレンス、クララ、チャーリーとアリスの炉辺の反応によって形造られた物語を使って、子どものためにアメリカの歴史の事件を物語った。

『おじいさんの椅子』につけられた短い序文において、ホーソーンはこれらの物語の歴史的な「真実」を強調する。「おじいさんと聴衆を除外すれば、作品の超自然的な枠組みを形成する椅子の冒険を除外すれば、続くページにある何ものも架空だと呼べない。作者は、本当に、時々自由に想像的な権限しか持たないが、真実を破って偽りの着色を与えないと思う詳細で歴史の大要を満たしきった」ホーソーンの言い方では、それゆえに、歴史の非空想的な扱いは「真実の」ものでありうる。歴史の一つの読み方しかありえないということば中心の仮定は当時の民族主義の歴史における不正確さと故意の歪曲に返答する。しかもこれらの作品における「アメリカの」歴史はマサチューセッツの歴史だろう。そして語られる物語は歴史と経験の特定の見聞を強調するために選ばれるだろう。従って、小説すべてにおいてホーソーンは歴史的偽りを軽蔑すると同時に、ここでは彼は（多分無意識に）19世紀ホイッグ党のニューイングランドの空論の計画の範囲内に留まる。

ホーソーンが書いた子ども向けの歴史物語は従って児童文学に関する19世紀の学派両方から取り入れる。歴史物語は当時の大衆的な児童文学に見られる明白な民族主義の宣伝でないが、それらはそれにもかかわらずその政治的な文化を反映する。同時に、ホーソーンの芸術的手腕は本を子ども時代と子どものための執筆のロマン主義の強調と関係させる。

それぞれの本において、ホーソーンは現実界の隠喩である互い違

いの世界を創造する。魔法と錬金術によって象徴された想像力の使用は空間と時間を通して旅行し、どこか他の場所にいることを人物（そして従って作者）に許す。これらの歴史を書くことにおいて、ホーソンは個人的な歴史、ボストンの税関と疲労させる独身生活から彼自身を遠のけた。セイレムの税関の上階に登り、見慣れた部屋の床は、現実界とお伽の世界との中間地帯となり、「現実」と「想像」とが出会い互いに融合する世界となるのを知った10年前に、ホーソンは子どもの本において日常生活からどうにかして逃れた。

作品を異なるよりエリートでない聴衆に向けることはホーソンに若い聴衆と彼自身のために逃避の世界を構成するのを許した。表面上『おじいさんの椅子』『有名な昔の人々』と『自由の木』は若者のために再話された歴史だ。表面の下に、3つの原文は繰り返して代わりの現実、物語の内部と外部にある支配権からの逃避を奨励する魔法、錬金術と変装の世界を示す。聴衆、読者、と作者にとって、物語は結局時間の限界を超越する。

『おじいさんの椅子』

3冊の本すべてにおいて、おじいさんの椅子は歴史的人物の失われた個人的な世界に読者を導く。「それは直ちに、これらの歴史の人物は個人的で見慣れた存在を持ち、彼らの生活の適切な描写として強いて受け取らされる外面的な活動の冷たい整列の内部に含まれていないと感じさせる。もしこの印象が与えられたら、ほとんどは成し遂げられた」椅子はホーソンの小説における循環するイメージ、「個人的で見慣れた存在」に導く他の時間と他の感覚に導く媒介物として役に立つ。歴史的な描写を通常構成する外面的な活動は個

人的な世界と見慣れたものにある力と意味に取って代わる。椅子のために歴史的な重要性は個人的なそれと、現実的なそれは想像的なそれと混ざる。

本の始まりの数ページは「外面的な活動の冷たい整列」から動いて遠ざかることを合い図する。最初のスケッチの枠の工夫は「ある快適な午後」、「部屋に蝶のようにひらひらと飛んで入って」くる「小さなアリス」と「夏の午後は若者にとって長い一生のようなものだ」という言葉で始まる。この夢のような子ども時代の場面は代わりの現実、旧世界に対して疲れたときに入るべくある子ども時代の失われた楽園だ。それならおじいさんが最初の物語を語る以前にさえも、時間の限界はぼんやりし始めた。ある午後は一生でありうる。天国は想像力において回復されうる。

『おじいさんの椅子』における最初の物語「アルベラ婦人」において、現実の世界への輸送は悲しみ、もろさ、と死に終わる。かなり厳格な本文はホーソーンが序文において告白した恐怖を証拠だてる。「作者の一番大きい疑いは彼がそれを向けようとする階級にとって読みやすい本を書くのに成功したかどうかということだ。ピューリタンとその子孫の陰気で、厳格で、厳正な性質によって示されたような教えにくい題材で、子どものために生き生きして面白い物語を作ることはニューイングランドが基礎を置く花こう石から繊細な慰み物を製造するように全く難しい試みだ」

ホーソーンにとって、若者のためにアメリカの歴史を書くことは必要とされる鮮やかな叙述とアメリカの歴史自体の「教えにくい題材」として彼が見るものの中に緊張を創る。首尾よく子どものためにアメリカの歴史を書くことは、それなら、文学の錬金術師、歴史の扱いにくい題材を教えやすくできる人を必要とする。題材はそれから新しい形に形造られるか適合させられうる。ホーソーンの子ど

もの本において、(古典神話である、『ワンダー・ブック』と『タングルウッド物語』において) アメリカの歴史の要求とジャンル(児童文学)の要求は相容れなく、彼はその対立を多様な度合の成功をもって克服する。

アメリカに出発する瞬間から、アルベラ婦人は2つの世界の間には捕えられる。彼女の過去、イギリスは彼女にとって再び見ることのない夢世界となる。彼女が「荒野の辛苦に耐えるには青白すぎて弱すぎる」ように見えるので、アルベラ婦人が「見守る」間人々が色々に散り、たたき切り、くわを使い、ひきずり、叫び、堀り、ひっつかんで逃げる困難の新世界を生き残らないのは明らかだ。この動的述語の頑強な世界はアルベラ婦人が成功できない、現実界だ。

アルベラ婦人のアメリカにおいては、敏感な人は生き残れない。新世界はアルベラ婦人の夫であるジョンソン氏は「彼の妻の死の1箇月後にボストンで死ぬ」ため敏感な女性だけでなく、推定により敏感な男性も負かす。何年か後、『大理石の牧神』において、ホーソーンはアメリカと世界におけるアメリカの芸術家の生存の探究にそれを発展させて、この領域をより大きくより個人的なやり方で探究する。『おじいさんの椅子』において、その考えはおじいさん(確かに今や大西洋横断の旅にもかかわらず生きている人物)から等しく虚弱な子どもへの警告として現われる。後ろに夢世界を残す人々は一つの世界と一つの現実に運命づけられる。現実の和解されていない世界は敏感な人にただ死につながる悲しいもろい存在を残す。

「アルベラ婦人」においてと同様「赤い十字架」において、旧世界から新世界への変化は再び他者の効果によって複雑化される。物語は手短かにジョン・エンディコットによる「兵士が下で何百年も戦ったイギリスの国旗」である赤い十字架の旗の破壊を説明する。劇は「カトリック教の偶像崇拝のなごりと考えたため、ピューリタンに

よってぞっとするほど嫌われた」十字架を特色にした。かつて国家の血の犠牲を起こさせる象徴で、旗は今エンディコットによって時代遅れで異教のものとして読まれる。国民の象徴はいやな下らないものとなる。世界とその兆候は劇的に、ほとんど魔術的に変化した。

新旧の、許された、不法な境界は対立する。「牧師は俗事に偉大な影響を持っていたので、牧師と知事はその日の出来事について相談し、人々が聖書の法に従って統治してもさしつかえないか相談したものだ」俗界のと霊的な法律は公的な力の構造を満たし形成する。ジョン・エンディコットはアルベラ婦人が2つの世界を隔合したように俗と聖を隔合しなければならない。

2つの物語の顕著な違い（一方は死にかかっている女性、もう一方はより確立した世界。一方は断念、もう一方は挑戦を特色にする）は他性の問題の多さを反映する。人は認識によってどの世界が現実なので、どれが想像なので、どれが人の最も深い信仰心と忠誠に値するか決定する。

「松の木のシリング銀貨」の活気に満ちた世界はより成功的にと幸せに2つの世界を合成する。松の木のシリング銀貨であふれるほどの金箱、「プリンのように丸くて太っている」花嫁、シリング銀貨でできたボタンがついた「暗紫色のコート」を着た風変わりな父、シリングの額と釣り合わされた娘の体重の計量、すべては違う時代とジャンル、「個人的で見慣れた存在」からと同様現実から遠い時代の性質だ。物語の中にあまりにも多くのお金が登場するのでそれは本当のお金として見られることができない、あまりにも多くの花嫁がいるので彼女は実物大より大きくなる。

商業的な成功の拡大されてゆがめられた象徴（お金、衣服、過食）はこの物語が歴史的人物の個人的な存在を現わすのを禁ずる。しかも我々はまた「赤十字」の冷たく関係している行動をはるかに越え

ている。「松の木のシリング銀貨」は存在した試しがないので想像力を必要とする時代である完全過去に起こる。現実の名前と記事は現実の過去の存在と存在を連合させる。アルベラ婦人が我々が古いと気付いた新しい世界で悩み暮らす一方、「松の木のシリング銀貨」は常に新しく想像される古い世界を提供する。現実と空想のこの隔合は最も自信を持って書く方法という、ホーソーンの芸術的談話の特徴となる。「松の木のシリング銀貨」は、確かに短いが、子どもの作品におけるこの相互作用の初めての出現だ。

物語の錬金術師であるジョン・ハルは「つぶれた銀のかんと大コップ……銀の締め金とこわれたスプーンと着古したコート of 銀のボタンと刀の銀の柄」を「広大な量のすばらしいシリング銀貨、6ペンス銀貨と3ペンス銀貨」に変える。彼は廃物を法貨に変えるこの能力によって大いに利益を得る。彼の称号である「造幣局長」と知事との賢い取り引きは商業的な発明の才の古典的なアメリカの性質に根付いている力を現わす。ホーソーンは、富と手段がハルの時代よりホーソーンの時代において一般人からより遠いので、多分富のきらきら光りほとんど魔術的に獲得された山にあまりにも自意識的にくよくよ考えながらハルを手短に描写する。

それでも、「松の木のシリング銀貨」は資本主義と想像力が結合できる世界を示す。ホーソーンの恥をさらすぎりぎりに利益のある仕事はハルの賢いがうわべは努力のない行動の結果である消費の喜びに鋭く立ち上がる。ハルの世界の描写の激しさは現在の人生を経済的事実によってあまりにも複雑に縛らせた現われる産業主義資本主義の体制を再び書くのを現わすようにその遠い想像された過去へのホーソーンの逃避を奨励する。「松の木のシリング銀貨」は物質的な富に対するそのような熱烈な注目から次第に結果を出した大衆文化を編集する一方子どものためにジョン・ハルの歴史を提供する。

収集を通して、おじいさんの賞賛は子どもに人物と人物の行動両方を高く考えることに権威を持たせる。収集が続くに従って衝撃は成長し、おじいさんは（ホーソンが同時により権威のある作家になるように）より頑固な語り手になる。おじいさんはハルの物語を偉大な興味を持って語るが、彼は「インディアン語の聖書」のなかのジョン・エリオットにより大きな賛成を与える。

語り手として、おじいさんは人生の終わりにおいてイギリスの聖書を翻訳することにより世間との通信を始めるのを試みていると暗示されているジョン・エリオットを尊敬すべきだろう。大衆的な市場に向けて書くことのホーソンの要望、孫を楽しませ教育したいというおじいさんの希望、とある文化を他の文化に開けたいというエリオットの期待はすべての表面的な言語の活動の連続に従事している個人を表わす。例えばエリオットの作品のおじいさんによる描写において、言語は「全くすべての他の言語に似ていない——インディアン自身によって以外に、母の口からそれまで学んだことがない言語——一度も書かれたことがない言語で、その奇妙な言葉は文字によって表現できないように思えた」「インディアン語の聖書」において音は言葉に変えられるが、エリオットによってのみ変えられる。一度これが成し遂げられたら、エリオットとインディアンのみが言葉を意味として理解できる。「人間が時代から時代まで貯蔵したすべての学識を所有すると考えられる博学な人」は音を言語に組み立てられないままに残る。エリオットの作品は学者が読めざる世界、社会の外で読めざるままになる世界に関係する。しかしエリオットのため、その世界は今日立って外で、エリオットの伝達しようという要求にかかわらず目に見えて読まれず得難い。

『おじいさんの椅子』はインディアン語の聖書がエリオットの同僚にとってそうであったように、一般読者にとって読めざる過去の

世界を繰り返し目立たせる。ジョン・エリオットのように、ホーソーンは社会のために読むのにこれらの世界を十分に見られる唯一の人だ。エリオットがインディアンとピューリタンの文化を言語を通して結ぼうと試す（そしてついに失敗する）ように、ホーソーンは『おじいさんの椅子』の言語を通して過去の現実と想像を結ぼうと試みる。聖書をインディアン語に翻訳する間孤独に座ってそうすることにより共通の言語と理解から隔たった世界に入るエリオットの絵は歴史の本を子どものための小説に翻訳する間税関に座ってそのようにして一般の読者から孤立している世界に入るホーソーンに対応する。

エリオットはもし失敗したら、聖書は不完全なまま残され往復文書は読まないまま残されると心配した。ホーソーンは永遠に彼の世界との往復文書はついに読まれぬか誤解されるのでないかと心配した。ホーソーン、おじいさん、とエリオットはみな彼等によって見られて読まれる世界は彼等がそれぞれの仕事において失敗すると伝達されないままになるのを恐れる。『おじいさんの椅子』においてただ言語のみを扱う唯一の物語は、本能的でついに伝達できない両方であると彼が恐れるものを伝達しようと努力する芸術家のジレンマを反映させる。

「松の木のシリング銀貨」のように、「沈められた宝」はお伽噺に関連づけて考えられ、見えざる世界、読めざるものを指摘する。そのなかで、ウィリアム・フィップスという「メイン州の田舎で生まれた貧しい男の息子」はマサチューセッツの政治家のウィリアム・フィップス卿になって、ぼろから富に移る。フィップスは人生の初期に偉大さを成し遂げるのを知っている。「彼はしばしば妻にいつか彼はとても裕福になって、ボストンのグリーン・レーンに「美しいれんがの家」を建てると伝えた」フィップスの予言は物語のなか

で実現されるので、おじいさんは子どもがこれらの表面上は努力を要しない、おとぎ話の利益を誤読しないよう確かめなければならない。「子どもたちよ、彼が運命を尋ねるために占い師に行ったと考えないように。彼自身の元気と新取の気性と勤勉な人生を送ろうという決心がより良い日々をあれだけの自信を持って期待させた」おじいさんはフィップスの予言は現実のばかげた考えでなく、願いのばかげた考えだと知っているので、フィップスの良い運命を精力と冒険心と決心の結果にしようとする。

アメリカの冒険心と精力がフィップスの成功をあおったというおじいさんの主張はフィップスが貧困から富に行き、石がお金に変わり、誰かが思いもよらぬお金の額を見て気が狂い、低木から埋められた宝の発見に至るにつれて下を切り取られる。ジョン・エリオットのわかりにくい音が言葉だったように、フィップスの石は銀だ。「1日か2日後に、彼等とはとても多くの銀貨の袋を見つけた難線の他の部分に降りた。しかしあまりにも長く塩水に残ることにより、石のような外観をした外皮によって覆われたので、金づちとおので細かく砕くのが必要だった。これが済んだら、銀の流れが船の甲板に噴出した」

錬金術の要素は幾分説明的な句によって和解させられているが（「塩水にあまりにも長く残ることによって」と「石のような外観を持った外皮」）、言語はその過程を魔術的に読むように奨励する。金槌と斧はあまりにも揮発性の力を放つので、それは「流れ」のなかで生命があり、監獄から「噴出して」現われる。この奇妙に活気をつけられた、文字どおりに力強い財産はお金に方向づけられた文化においてフィップスに権力と成功を与える。

「松の木のシリング銀貨」においてと同様に、文化の競争的な勢力において人が成功的に参加するのを可能にする大きな額の通貨は型

にはまらないやり方で獲得される。ハルもフィップスも富のために因習的なやり方で競争しない。財産はあまり多くなく、隠されてもいないし、何年もの苦勞の産物でもない。ハルとフィップスは自然なお金に対する好み、古いベルトのバックルか砕ける石にお金がある可能性を読む能力を持つように描かれる。この富に至る道の訂正において、産業化の機構はなく、熱狂した生産力の人生もない。誰も長い、不快な時間を働かないし、誰も不安な経済的な未来を恐れない。これらの物語における代わりの世界は上流中産階級の存在の喜びに帰着する。若い聴衆と読者と作家は資本主義者の文化の荒い機構と直面するのを逃げる。

「沈められた宝」に続き『おじいさんの椅子』を終わらせる短い結びの部分において、より若い聴衆にほとんど向けられていない段落が物語の空想的な扱いを擁護する。

「しかし、結局」とおじいさんは続けた、「いかなる他の古い椅子でも、もし記憶を持ち、思い出を書く手を持っていたなら、私があなたに教えたどれよりも奇妙な物語を書き留めれる。世代から世代へ、椅子は人間の利害関係のさ中に親しく座り、人間が仲間と持てる一番秘密で頼みになる交際の日撃者だ。人間の心は炉辺の椅子において一番良く読まれるだろう。そして外部の事件に関しては、「悲しみ」と「喜び」は周辺と内部に連続した移り変わりを保つ。今や我々は古い椅子に楽しそうに座り、家庭の到る所に暖かい、炉辺の光の発光を投げる「喜び」のうれしい顔と白熱している形を見る。今や、考えなかった一方、暗い衣服を着た会葬者の「悲しみ」は「喜び」の場所に盗み入るが、長く保たない。想像力は家庭の椅子の経験に包含されているようなあまりにも幅広い話題をほとんど把握できない」

確かにこの段落は以前に松の木のシリング銀貨と決められた宝でもってくどかれた聴衆に向けられていない。もし椅子の経験が人間の心の経験であるなら、人の想像力のほとんどすべてはそれを正確

に提示するよう要求される。確かに、「想像力はあまりにも幅広い話題をほとんど把握できない」ので空想の使用が必要だ。「沈められた宝」の世界からいったん現われさえすれば、想像力は退いて、ホーソンの談話は事実と説明と強調をもって現実界に戻る。椅子の想像上の使用のおじいさんの防御はホーソンのおとなの聴衆に親しみ深い世俗的で感傷的な言語において言い表される。

しかしホーソンは自信を持って書くのを可能にした中間地帯について多く学んで、過度の想像力を擁護するおじいさんのひそひそ話は窓に飛んで椅子に体を据える猫によって続く。「ネコちゃんや」と小さなアリスは言った……「とてもお利口に見える。おじいさんの椅子について物語をしてくれませんか！」アリスの要求は適切に本を終わらせる。アリスは物語の過程において知識の因習にとらわれない源に接近して十分学んだ。もし石が銀に、椅子が旅行の案内者に、世界が夢に変わるなら、猫は多分話せるだろう。収集のなかの物語は物語、歴史、時間、と真実の子どもの意識を奨励した。おじいさんの気紛れな解釈はこの高められた意識を無効にしない。おじいさんによって刺激されない結果に子どもが到達する可能性は残る。誰がアリスが猫が物語ると想像する物語の種類がわかるだろうか。『おじいさんの椅子』は賢い猫がその物語を始める準備ができて事実と想像の間で終わる。

『有名な昔の人々』

『有名な昔の人々』の始めの何ページかにおいて、おじいさんとおじいさんの椅子の表示は時と場所と多く関係している。「しかし今、秋のは薄暮において、暖炉の火の明滅する炎によって照らされて、彼等は古い椅子を見て、それは以前そのような興味深い様子をした

ことがないと思った。そこに200年の尊ぶべき威厳のなかに立った。炉の光はオーク材の背に造り込まれた花と群葉の上に揺れた。そして頂上のライオンの頭は、ほとんどそのあごを動かしたてがみを震わすように思えた」おじいさんは椅子に座って、「あたかも過去の人生がすべてそこに描かれるかのように、またはそれが未来の世界の予想であるかのように熱心に赤い燃えさしを見つめた」おじいさんは（あたかも2つは幾分交換できるかのように）現在に座って過去または多分未来について考える。擬人化された椅子は「過去の影の多い領域」に住む。

過去から現在から未来へのこのすべりは人間と共感し、暖かさを創ることはそれから期待される良い役目の一つに過ぎないのを知る、親切で朗らかで社交的な精神によって見張られる。それゆえにそれは暖炉の前の床で踊り、部屋中無遠慮に笑い、多くのおどけたしぐさをし、囲むすべての顔の上にうれしい輝きを投げる」本の最初の形式的なスケッチが始まる前に、我々は原文は優しくて力強い精神によって見張られるのを知って、椅子は生きて「以前そのような興味深い様子をしたことがなく、」おじいさんははかなさについて考え込んで座る。

「文学の職業を歴史的だとして包含する」ホーソーンの要求の議論において、マイケル・コラカーシオは「時間の現実性」に対するホーソーンの信仰を考察して尋ねる。「人はアメリカ自体においてより時間からのより紛れのない抜き取りに出会ったことが他のどこであるだろうか。高尚にされた祖先の崇拝と自然的にされた黙示の間のどこに、皮肉の党派はよりあからさまに存在のために叫んだだろうか。そしてその皮肉は歴史的以外の何でありえただろうか。それが力説する必要があったのは、まさにすべての時と場所における完全な現実だ」『有名な昔の人々』において、はかなさともっと特別

に、「時間からの紛れのない抜きとり」両方がおじいさんの注目と椅子の存在を引きつける。

『有名な昔の人々』の序文は『おじいさんの椅子』の続編の十分な根拠を示そうと試みる（「それはそれゆえに我々の先立つ本から独立させるのにそれ自体で十分完全だ」がそのような正当化は必要でない。『有名な昔の人々』において、おじいさんとおじいさんの椅子と物語自身は最初の本においてより重要性において豊富だ。収集が始まるにつれておじいさんの位置でさえも時間の境界がその厳格さを失った談話のより複雑な構成を示す。

おじいさんは（『おじいさんの椅子』の最後の話題をもって『有名な昔の人々』を始める）ウィリアム・フィップス卿の歴史を終え「魔女妄想」の言及を含む。彼は「彼等が知るのに適していると思ったようなこの憂鬱な事件の細部を聴衆に」与える。彼の直接の聴衆が（ホーソーンの読者と同様に）子どもによって構成されているので、おじいさんは「彼等が知るのに適切」で彼等自身の悪と「とても恐ろしい仕事」を起こす彼等自身の能力を見なければならない。後に『有名な昔の人々』においておじいさんの物語の目的を問う根拠があるが、今は言及はほのめかすもので、本の最初のスケッチが紹介される。

子どもは悪くなる潜在能力があるので、彼等は「旧式の学校」が説明するように人生において良くふるまうための適当な訓練が必要だ。エゼキール・チャーヴァー先生は男の子を成長した、責任のある男に変える恐ろしくて力強い技ができる別の錬金術師だ。この技術にともなって、チャーヴァー先生は予言の才能を持ち男子生徒の将来が見通せる。「あるわんぱく小僧はこの後医者になり、薬と一服を与え、阿ぎの香水をつけて、人生を通して真面目にゆっくり大股に歩く。別の人にはバーで口論して、富と名誉に向けて戦って、衰える年

齢において、皇帝陛下の会議の尊敬すべき一員になるべきだ。3人目——先生のお気に入りだ——は今墓にいる昔のピューリタンの牧師の立派な後継者になるべきだ。彼は偉大な宗教的熱情と効果をもって説教し、将来の世代の恩恵のために、印刷物と原稿で、幾冊の説教の本を残すべきだ」

錬金術と予言の力を所有するのに加えて、チャーヴァー先生はなんとか時間を逃れる。教室は毎年男で一杯の永遠の場所だ。しかし、教室の外で、根拠地から離れて、チャーヴァー先生は「忙しくて利己的なロンドン」に思い切って進むウェイクフィールドのように「場所は失われ、彼自身は世界において見知らぬ人」のように感じる。しかしウェイクフィールドは都会の無名のために家庭と炉辺を去り、一方チャーヴァー先生は永遠にでなく祝日のためにと「夕食をとりて帰る」ために教室を去る。チャーヴァー先生が和解させられていない現実の世界のために永遠を去るときにのみ力は揺さぶられる。

チャーヴァー先生の力は印象的ではあるが、それはおじいさんのそれより見劣りする。予言の能力は過去（チャーヴァー先生の教室）を見通し、おじいさんと孫にとってすでに過去の未来を予言する能力を含む。「旧式の学校」において、おじいさんは教室が外にある世界ほど真実、男子生徒の将来とチャーヴァー先生の予言ほど真実な過去の世界を組み立てる。おじいさんがこれらの世界と時代をぼんやりとさせるのは彼の談話の特徴だ。いったん子どもが時間の押しつけられた境界の気紛れな性質に気付きさえすれば、彼等は教育され、（力によってとりこにされたチャーヴァー先生のように）現実における位置はなくなり、世界において見知らぬ人になることを恐れずに教室を去る準備ができる。

「1晩か2晩後に」おじいさんは「ずっと過去のことについて習慣だったように黙想しながら」座っている。「有名な昔の人々」を書く

間のボストンの税関での仕事、のちの「税関」において「習慣」に当てがった複数の意味と人生と芸術において習慣の命令との終生の葛藤は人生と芸術におけるおじいさんの習慣の強調された意味の可能性を示す。おじいさんの黙想が過去に一定に根付いているという主張にかかわらず、『おじいさんの椅子』と『有名な昔の人々』においてこれらの黙想は「ずっと過去のもの」を現在と未来と想像力と混ぜる。おじいさんの習慣は黙想とその後の物語を通して「ずっと過去のもの」を現在にもたらすことだ。この混ぜものをする過程はおじいさんに時間を超越する力と歴史的な改正においてすべての時間と場所の完全な現実を主張することを許す。

それなら、「ボストンの少年の行列」が訪れる時、おじいさんが「あたかも多くの年月眠りについていて、太鼓と歓声によってただ今日覚めたかのように一種の驚きのうちに」目覚めるのは不思議でない。このリップ・ヴァン・ウィンクルのまねは過去と現在と未来の制限の外に踏み入れることに関連づけて考える危険を警告する。おじいさんは目覚めたとき、瞬間的に世界における自分の位置を失った。彼は現在の印を読めない。いったんロレンスが心配を説明すると、おじいさんは安心して（「ああ、よかった！」とおじいさんはほほえみながら言った）、直ちに過去を現在と結び付ける。「少年はすべての時代において同じだ——いつも父をまねし——いつも成長した男の事柄に偽の関心を持つ。」

この判断は時間の流れにおいて彼自身をなくしたことに対するより初期の「驚き」を黙想する。今習慣の外に踏み出す人は単に一時的に失われる危険を冒すように思われる。すべての世代は似たような性質を共有するので、リップ・ヴァン・ウィンクルは、他のすべての動機は古ぼけて明らかになるので、例えば、現在の行進の原因を尋ねる必要だけがある。

しかも（過去において）想像されてないが、現実のものはいくらかの魔術的な可能性は習慣を越えている。この部分の終わりで、おじいさんは「あの同じ晩に、一年のすべての晩にすべて出版された3つの新聞の登場によって中断させられる」読むにつれて、おじいさんの黙想は再び過去に集中するが現在の眺望に根付いている。「とにかくするうちに、おじいさんは我々の祖先が今大陸を通して、すべての地方とすべての方角から、飛んでくる無数の新聞の群れを見越したら、どのように思ったか考えずにいられなかった。ある小さな週刊の新聞が大陸全体に十分であるとしたら、彼等はなんとつまらない、好奇心のない人々だったろうか！」

新聞の印刷と分配は過去を超えていて「我々の祖先」によって突然生きた新聞が「群れ」になって精霊のように「大陸を通して」「飛ぶ」魔術的な過程を構成しているように思われる。過程は我々の祖先の習慣の外で、彼らはそれゆえに印が読めないためにそれを魔術的だと見る。これらの祖先を「つまらなく、好奇心のない人々」として分類することは『おじいさんの椅子』と『有名な昔の人々』の教訓に矛盾する。もし彼等が本当につまらなく好奇心がなければ、印刷の過程は発展しなかつたであろうし新聞は今そうである大衆文化の原文の表示にならなかつたであろう。瞬間的に現在に根付いていて、おじいさんの黙想は産業化と都市化が商業と大量生産によって支配された現代社会をもたらした前のニューイングランドを想像する無能を現わす。

椅子は次に「断食と夜の勤行が貧弱にならせやつれさせて、たぶんほとんど世界に所属しなかつたかのように見せた」コットン・マザーに移る。「拒否された祝福」において魔術と妖術は1720年代の天然痘の流行を研究するにつれて文化における地位からマザーを締め出す。アフリカの小冊子を考察することにより、マザーは天然痘

の接種の可能性を発見する。しかし、この情報は「どのように彼が古い魔女妄想において惑わしたかを思い出した」ため大衆によって拒否される。彼が道を歩くにつれて、女性は子どもをひたくり、文字通り彼を未来の世代から保つ。

地方の医者は「ゲイレンかヒポクラテスによって接種のようなものは言及されなかったし、現代の医者がそれらの昔の賢人より賢いのは不可能だった」ので可能な治療のマザーの発見をけなす。解しがたい文書を調べることにより、接種に対する医者と市民の抵抗に明らかのように、マザーは時間をいじくった。「拒否された祝福」において、マザーは明らかに時間より進んでいる。我々を天然痘の流行に連れ戻して、おじいさんは「接種は普遍的に実行され、何千もの人がそれにより死から救われた」ときまで進ませる。それから人々は時間をさかのぼり、「そのとき墓に眠っていた年老いたコットン・マザー」を思い出す。おじいさんのスケッチの間、コットン・マザーは、時間の外と、時間の前に居て、おじいさんが物語をするにつれて、過去の時間に居る。

そしてそれから時間は『有名な昔の人々』のこの第6の部分が終わるように静止する。

そして今おじいさんは頭を彼の足のせ台に乗せて、小さなアリスはぐっすり寝てしまったのに気付いた。確かに、クララが観察したように、彼女はケベックに対してホベンデン・ウォーカー卿が遠征した時からバーネット知事の死まで眠っていた—およそ18年期間だ。そしてしかも、そのような長い仮眠のあと、かわいい小さなアリスはまだほとんど5才の金髪の少女だった。「何百年も眠って、いつものように若くて美しく目覚めた、魔力を持つ姫の物語を思い出す」とロレンスは言った。

ロレンスの魔力を持つ姫が年をとるか普通の認識論に理解力をなくすことなしに時間の境界を無視できるように、コットン・マザーは

一度にいくつもの時間の境界を越えられ、だから小さなアリスは18年眠ってしかも5才でいられるのだ。再び、おじいさんのスケッチの一つは現実の限りない性質に特権を与える。

7つ目の部分は「イギリスから地方に紹介された様式や態度」と時間の境界との彼らの関係の議論で始まる。祝祭、舞踏会と衣服の描写において、おじいさんは「社会生活における一般的な変化」を指摘する。おじいさんの椅子は時代の趣味に従って作り直しを節約されないし、いったん飾られると、「ほとんどの人は最新のロンドンのやり方の椅子にそれを間違えた」おじいさんは椅子が「新しい発明のすべての光る外観の下いつも古くていたんだ中身があるという例」だというこの知恵を使う。「様式と態度」が表面的に変わるところに、「古くていたんだ中身」は残る。やり方の「グロテスクな盛装」のすべての下に「チャーリーの元気な小さな像」が立つ。この節において、おじいさんは時間の境界は「様式と態度」のみに仕えることを説明する過去の耐久性と粘り強さを強調する。彼らは時間の流れを止められないし現在の時間を唯一の現実と孤立させるのもできない。

おじいさんはニューイングランドは「ノヴァスコシアの近く、ケープブレトン島にある防御都市」であるルイスバーグに対して戦争の遠征を準備するために錬金術を使うのが描かれる「地方の召集」において流行から戦争に移る。軍隊に利子支払のため資金を蓄えて、「州議会は直ちに、あたかも魔法の呪文によって、知事が古い大砲と弾薬とさびた刀と旧式歩兵銃とフランス人を殺すのに役立つすべての他のものを獲得するための大量の紙幣を出した」

魔法は過去の武器がそうであったように戦争の努力を始めるために必要だ。「どのような様式とやり方であろうと、武器ほど貴重でない。ふごは鳴り、金づちはしきりに鉄床にがーんと鳴り、一方鍛冶

屋は他の戦争のこわれた武器を直していた」これらの武器は「初期のピューリタン」「マイルズ・スタンディッシュの兵士」刀が今「錆びによって腐食してフィリップ王戦争の血によって染みが付いた」ずっと昔に死んだ戦士という祖先の武器を使って過去に横切って入る。このようにして、「背が高く、やせ気味のぎこちない奴」、「ヨーロッパの訓練された役人」を「脇が痛むまで笑わせた」「荒い顔と丈夫な体格」をした男は、技術のある、勝利を得た兵士に変わる。

魔法と過去からの武器によってあおられたお金をもって、戦争の努力はあまりにも成功的なので、「ウィリアム・ペパレル」と名付けられた裕福な商人」であるその陸軍大將は彼の勝利のためウィリアム・ペパレル卿に変身させられる。訓練されていない非戦闘員による「幾百の重い大砲によって防御された…広大な高さと力の」壁がある防御都市に対する攻撃は成功できる。お金は兵器類に変わる。「風変わりな人々」は立派な戦士に変身できる。そして商人は準男爵になれる。そのような変身は「時間からの紛れもない抜き取り」から起こる。

「地方の召集」において、おじいさんの物語は時間が歴史的事件とそれらの事件の我々の知覚に持つ力強い効果を現わし始める。エゼキール・チーヴァー、ボストンの少年の行進、コットン・マザーの例と様式と態度の変化する形は時間の境界を越えて見るようにそしてそのような境界が任意に置かれるかもしれないと気づき始めるように読者に前もって教え込む。過去の武器は兵士の努力に火をつけるだけでなく、それらは過去、現在、未来の戦争と武器と民族をつなぐ。おじいさんがはかなさに特権を与えたことは『有名な昔の人々』において絶えず続いた。「地方の召集」において火刑柱は一学校教育でなく、天然痘の接種でなく、様式の態度でなく一我々の歴史、人生、と死の見解が我々の時間の知覚のおじいさんの形成に

よって顕著に変えられるにつれて以前より高い。

この知覚の自動的調整は、おじいさんが感謝祭に彼の椅子に座るにつれて『有名な昔の人々』の9つ目の部分に続く。

彼はこれは人生の良い感謝祭の一つとして書き留められるべきだと感じた。確かに、すべての以前の感謝祭は現在のものに役目を負った。なぜなら、祝福と悲しみを伴った幼年時代と青年時代とおとなの時代は彼が大きな椅子に静かに座る間前を過ぎ去った。消滅した場面は空中に描かれた。死んだ友人の形は彼を訪れた。もはや聞けない声は無限から永遠までの反響を送った。これらの影は、もしそのようなものであるなら、ほとんど彼にとって、現実にあるもののように——子どもの楽しい叫びと笑いのように——目の前に踊る日光のような彼らの姿のように真実に思えた。

この節において、我々は初期のスケッチにおいて示されたものを教えられる。過去は現在の本質的な部分でないが、それは「実際にあるもののように真実だ」それに加えて、記憶は「混ざった悲しみ」を幸せに変えられるので錬金術の特質を持つ。時間はあまりにも力強いのでそれは（幼年から老年までの）人々を変身させ、感情を変化させそれを含むように工夫された人間の境界を越える。ここでのおじいさんの黙想は彼の孫に動かされず従って私的で個人的で特殊だ。我々ははかなさとアメリカの歴史からはかなさと個人的な歴史へ移る。この多くの人生から一つの人生への移行ははかなさに特権を与えることを続け、それらの日々が我々の人生か遠い過去にあるかどうかにかかわらず「以前の日々」は「永遠の所有」だという我々の理解を確実にする。

『有名な昔の人々』の最終のスケッチの「アルカディアの追放人」

は「古いフランス戦争のすべての事件のなかで、おじいさんは」アルカディア人の世界への追放より「興味深いものはないと考えた」ため特別な注意を引く。「彼らの住み家と教会はすべて焼かれ、牛は殺され、国全体は横たえられた屑で、彼等のうちの誰もイギリス人が去ったあと彼等の古い故郷で宿か食べ物を見つけられなかった。囚人の何千人かはマサチューセッツに送られた」

アルカディア人は永遠に家を無くし、家族と友人を亡くし、外国語を話す別の国に追放される。マサチューセッツに到着して、彼等は全く時間から外れている。「あれらのかわいそうな追放人と世界との間のすべてのつながりは直ちに切り落とされたかのようにだった」「外国の岸に彼らだけで残され、」彼らの苦境は「残酷さと非道」、おじいさんがあまりにも重く強調するので「小さなアリスが突然すすり泣いて現われる」性質で豊富で我々は「おじいさんは意図したより多く彼女の共感に触った」と伝えられる。

スケッチの終わりまでに、おじいさんの物語は「子どもに安全で平和な炉辺の祝福を感じさせ」おじいさんの図画的の描写と著しく不釣り合いな教訓だ。確かに「安全で平和な炉辺の祝福」は5才の子を恐怖させる残酷さと非道の物語なしに気づけない。もしこの事件（「古いフランス戦争のすべての事件のうち、おじいさんはもっと興味深いものはないと思った。」と語る上でのおじいさんの目的が彼の物語に釣り合っていないとしたら、目的は彼が子どもの教育に必須で、一時的な感情の混乱に十分価すると見るものにちがいない。

「アルカディアの追放人」のすぐ前に、我々はおじいさんの「以前の日々」は「永遠の所有物」だと学んだので、アルカディア人の物語は世界と時間から追放された発破をかける人々の可能性を鮮やかに描く子どもの所有物になる。過去は「現実にあったものより真実」なので、子どもは「アルカディアの追放人」を聞くにつれて、彼等

の残酷さと非道を直接の現実と時間によって提供された可能性のたまりに加えなければならない。おじいさんの以前のスケッチは「アルカディアの追放人」の恐ろしい真実に築き上げた。彼のはかなさの不変の強調は、歴史の再話と結合して「すべての時代と場所の完全な現実」を主張する。

ニーナ・ベイムはおじいさんの「歴史を再構成しようと試みる目的」を「過去の原因に関して解釈して現在を理解する方法」を提供して、「彼等自身の人生は永遠の現在において過ごされるのではなく、はかない存在の限界を超えて拡大する時間的な枠組みのなかで起こると気付かせるのを助けると見る。歴史の学習は思慮がある瞬間が過去と未来と関係し、軽率な経験は反映によって圧倒される子ども時代からおとな時代への必然的な移行と同種だ。歴史は、この見解において、獲得を避けられないことの知識だが、獲得された方法が重要なのだ」ベイムにとって、おじいさんの目的は（確かにアリスの部分においていくらかのすすり泣きに価する）、子どもに死ぬべき運命を認容するのを手伝うことだ」もし子どもが彼等の人生は「彼等自身のはかない存在の限界を超えて拡大する時間的な枠組みのなかで起こる」と学べばおじいさんは彼等の死ぬべき運命の認容だけでなくまた彼等が心に時間と現実の変わりやすい領域を持つ以上、不死の悟りも教える。子どもが教育のこの本質的な状態を無視しないように、椅子はついに「椅子を、出来るだけ初めてリンカーンのアールのオークの木から作られたときに、現われたようなもとの椅子に修繕したいと願った」トマス・ハッチンソンに渡る。（そのようにして永遠にする）のハッチンソンの要求は「古い椅子が通ったすべての冒険と移り変わり」を知る結果だ。この知識は、「古い椅子」について知ることは、作品全体の象徴主義において、初期マサチューセッツにおける歴史的包容性の動く中心について知ることな

ので、「確かに高い称賛」だ。

椅子の知識と鼓舞する存在のこの知識にかかわらず、ハッチンソンによるマサチューセッツの歴史は、おじいさんが言うように「もっとつまらない作文の断片は人の筆から来たことがない」し「彼自身と他の貴族の入植者のための遺伝的な地位の光景」は「彼が前に座った、火の赤い燃えさしのなか以外に」どこにも存在を持たないので「そのような異常な靈感」によって援助を受けない。

ハッチンソンが「ニューイングランドの経験と仮定の最も深い現実と接触して」しかもこれらの現実がどこに先導するか見ないのはなぜだろうか。コラカーシオによると「単に歴史的想像力の徹底的な失敗」、ニューイングランド人の「真実の性質とか把握する」失敗、『自由の木』においてもっとのっぴきならなく描かれる失敗のみによる。過去の知識を無視することにより、ハッチンソンは未来のどんな認識も拒否する。彼は愚かで限られた夢が「灰に砕かれた」死にゆく老人として残る。子どもがすべての時代の現実を安く見積もらないで、歴史的な想像力を失敗させない限り、理解は、ハッチンソンのと違って、「はかない存在の限界を超えて」拡大する。

ハッチンソンの夢が砕けたあと、おじいさんは4つのイオニア式の柱によって支えられた美しい小さな黒たん製の神殿のなかにたれ下がる腕時計」を見て、「おじいさんはこれらの『有名な昔の人々』についての物語によって、すでに、あなたを眠らせた！」と彼らに言うことにより、子どもたちを寝かせて、本を終える。『有名な昔の人々』の最終的な映像であるおじいさんの時計の描写はギリシャの神殿に時間を安置するという衝撃的なものだ。構成における調和はギリシャの目に宇宙の秩序を現わした。それゆえに、腕時計は宇宙の秩序を理解して評価した民族を子どもに思い出させる。

しかも腕時計はまた現在の時間の現実も印し、一方腕時計をちら

と見るおじいさんの一目は彼が物語る間時間を忘れたことを示す。ホーソンの時間に対する高く自意識的な関心は聴衆に歴史と死ぬべき運命を教えるのを許す。時間からの紛れのない抜き取りと限界のない現実の概念はまた現実と想像の組み合わせ、彼が権威と自信と芸術的談話と力を得た中間地帯へのホーソンの入場も許す。『有名な昔の人々』がおじいさんの椅子の永遠の世界において時間を正確に区別する空想的な腕時計のすばやい一見によって終わるのは適当なホーソンらしい皮肉だ。

『自由の木』

「若い読者は椅子についてのおじいさんの物語に飽きたらどうか」と、直接読者に向けて言われた3つの作品のなかの唯一の序文である、『自由の木』につけられた序文は始まる。それはおじいさんの椅子の情愛の深い描写で『自由の木』の来るべき事件の短い概略を加えてなめらかで、想像的で効果的だ。「これらすべてのすばらしい事柄のさ中、我々はおじいさんの椅子を見失わないようにしなければならない。丈夫なオーク材の足に立ち、それは一つの場面から他の場面へとこつこつとてくてく歩き、歴史的人物が席を探してたまたま見回っているとき、最も優しい自己満足でいつもそれ自身をぐいと押すように見える。あのすばらしい古い椅子！読者には出来るうちにそれを大いに利用させよう。なぜならこの小さな本をもっておじいさんは歴史に結末をつけ、公の目からそれを引っ込めるからだ」

「あのすばらしい古い椅子！」と勧告的な「読者には出来るうちにそれを大いに利用させよう」で、言語は懐郷に面する。椅子と作家両方は物語の2冊を通してこつこつとてくてく歩いた。このことが

序文の落ち着いた言語、椅子と最も擬人化して従って最も力強く描く言語を説明するだろう。

本の最初の部分において、おじいさんはじゅうたんをゆっくり歩き、嵐が外に盛んで、「風のすべての一吹きと共に」火は「冬の嵐の叫声を笑って楽しみながら」飛ぶ。新年の背景、おじいさんの不安、自然の不安、と火の精神が騒ぎで楽しむの—すべては変化を示す。カルヴィン・アール・ショアラは「新年の嵐の天候」を「近づく革命の日々」の印として正しく見る。おじいさんの椅子でさえも、その影が「揺れ、はね、踊り」、小さなアリスに「明滅する影を捕まえようと」させる。「なぜなら5才の子どもにとって、影は物質のようにほとんど真実に見えるからだ」物質と影の間の区別をつけるアリスの無能はおじいさんの椅子を彼女にとって特に効果的にする。過去に手を伸ばすことによって、彼は一部物質で一部影のような、遠い時代の混ざった現実に到達する。

チャーリーはまた以前よりおじいさんの物語をよく受け入れる。「椅子についての物語を聞くのは」と彼は嵐によって戸内に閉じ込められて「何もやらずに座って、何も考えずにいるより良いだろう」チャーリーは「それぞれの側に金の文字で描かれた、おじいさんの椅子の称号を与えられたすばらしいそり」であるおじいさんからの新年の贈り物を使えないので元気がない（そして従って一層物語を聞く準備ができています）。この上手く名付けられたそりはおじいさんの椅子のような乗り物で、ある場所から別の場所へと素早く移り、素早く時間を通して動ける。チャーリーはそりを文学的で隠喩的に使用したいと考える。天気が前者を防ぐので（だから彼は「座って何もやらないでい」なければならない）、彼は後者で話を付ける（そして少なくとも「何も考えずに」座らない）。

アリスとチャーリーは読者は新しい物語に対する子どもの高めら

れた受容力を見るのだが『おじいさんの椅子』と『有名な昔の人々』の物語が彼等に持った効果を知らない。子どものうち年長で鋭いロレンスは学んだものに関してもっとずっと意識する。より多くの物語の要求は認識を現わす。「古い椅子は今日存在の別の一年を始めた」とロレンスは言った。「我々は急がなければならない、さもなければ我々が古い歴史を終える前に新しい歴史を持つだろうから」接着語法の「新しい歴史」は読者は、ロレンスのように、今時間の境界は変わりやすいと理解する。歴史として考えられているものは3時間前または3世紀前に起こったかもしれない。おじいさんは聴衆を満身に訓練した。ロレンスはすぐに歴史は人がそれをどのように見るとそれから人が何を学ぶかによるのが分る。

おじいさんが物語を始める前に、アリスは「ライオンの頭は彼女に向かってうなずいて、あたかも幅広い顎を開けて物語を語るかのように見える」と確信する。ライオンの頭はこの瞬間話さないが「椅子が全く存在する間話したという記録か伝統がないため」おじいさんはそうするまで「待つのは価値がある」と考えない。この場面はライオンの頭が実際おじいさんと話す『自由の木』の最後を予告する。この場面はまた記録や伝統——おじいさんの道具——の欠如が椅子の話す歴史を除外しないと強調する。おじいさんは彼が持つ情報に重く頼り過ぎで従ってライオンの頭が彼に話しかけたとき、知らないで捕まった、または最も少なくとも知らないで捕まったようだ。

しかし当座は、おじいさんは印紙条例とニューイングランドの反応を囲む状況を語る。

子どもよ、我々の椅子の以前の歴史は古いピューリタンはどんな荒く、不屈で、厳格な一群の男だったかあなたに考えを与えた。し

かしずっと昔、あたかもそれらの性質は消えたかのように思えた。しかしイギリスが植民地に誤りを提供するやいなや初期の定住者の子孫は祖先と同種の気質を持ったと説明した。一瞬前に、ニューイングランドは王冠の謙虚で忠実な話題のように見えた。次の瞬間、彼女は古い王に抵抗するピューリタンのいかめしく、暗い、特徴を示した。

おじいさんは特性は消滅しているかのように「思えた」と正しく言う。彼はそのような特性は完全に消えることはないが、時間とともに再生するのを知る。もしイギリスが過去の教訓から学んだなら、印紙条例は試みられなかったかもしれない。イギリスはニューイングランドが「謙虚で忠実な王冠の話題」から「古い王に抵抗するピューリタン」に変身したと覚えて期待しただろう。

印紙条例に対する抵抗は「ボイルストーン市場の反対のエセックス通りの角の近くに立った古いにれの木」の下での会合と「木の上での人形の縛り道につながる。真直ぐなすそを付けられたコートと半ズボンを着た縛り首は本当の男のように見えた」おじいさんは縛り首を木の「風変わりな果実」と表現する。他性こそが自由の木の本当の果実、時間の果実を変装させるのを助ける。過去から学ぶのを無視することによって、イギリスは時間を無視し、そのようにして風変わりな果実は確かにニューイングランドで生まれる。

本の最初の正式のスケッチである「ハッチンソンの暴徒」を紹介して、『有名な昔の人々』においておじいさんが効果的に退去させた『自由の木』の第3の部分に木より多くの果実が現われる。ここで、王に対するハッチンソンの忠実はそのニューイングランドの関心と対立する。ロレンスは「ハッチンソン氏は我々のピューリタンの祖先の歴史を書いたように、人々の気質は何であったか知って、不当

に扱わないように注意した」と述べることによりおじいさんによるハッチンソンの軽蔑的な押つぶしに我々を準備させる。ロレンスは少なくとも人は過去から学ぶべき、子どもでさえもハッチンソンが何が起こるかわかっているべきだったとわかるのを知っているのを示す。おじいさんはハッチンソンは「イギリスの王の力を信頼した」と答えてハッチンソンの理解力の欠如を説明する物語をする。

ハッチンソンの家を攻撃する暴徒の性質はそれを「人間と共感して、暖かさを創造することはそれから期待される良い役目の一つにすぎない優しく、朗らかで、社交的な精神」として、そして「冬の嵐の悲鳴に対して笑いながら楽しみながら、炉から上に」飛びはねながら『自由の木』の最初に登場したものとして『有名な昔の人々』により初期に紹介された火の精と関連づけて考える。暴徒の武器は火で、彼らの行動と感情は暖炉の火の活動に似ている。「その間暴徒はより激しくなっていて、王の友人を家と家庭から焼き出すために町に火をつける準備ができているようにさえ思えた。そしてしかも、彼等は怒っていて、時々あたかもいたずらと崩壊が楽しみであるかのように突然笑いの大声の唸りをしだした。個人的なニューイングランド人が暴徒を構成するが、一緒に取ると炉辺の精神のように力強くて予想できない。ほとんど超自然的な感情の目標は「副知事のすばらしい館、イオニア式の壁柱によって飾られた大きな煉瓦の家」だ。イオニア式の壁柱は『有名な昔の人々』の終わりでのおじいさんの腕時計のより初期の描写を思いださせ家にいるハッチンソン自身が過去にいて現在と未来に気付かないように過去にある家に住むハッチンソンを示す。

自覚の欠如のため、ハッチンソンの家は壊され家族は逃げるのを強制される。窓から暴徒を見ると、ハッチンソンは「民衆の怒りは王の怒りよりずっとひどかった」と感じる。ハッチンソンが窓で

凍っていて、おじいさんはハッチンソンが学ぼうとしなかったことを子どもに教える判断を下す。「ハッチンソンのような勤王家で貴族が、低くて卑しい人が対抗して並ぶとき、王、貴族、と偉大な人がどのように無力かを学んだかもしれない瞬間だった。もしジョージ王がそこにいたら、彼は彼自身のために何もできなかつただろう。もしハッチンソンがこの教訓を理解して覚えたら、後年になって、故郷の国からの追放人になるまたはついに遠い国に骨を横たえる必要がなかった。ハッチンソンは貴重な知識を使うのに失敗して、時代の後ろに残った。我々は彼を透明な窓ガラスだけによって離されて、過去（家の中）から未来（群衆）を見ながら文字どおり窓の後ろに見る。荒々しい暴徒の他者、ハッチンソンが拒否した未来の他者は窓ガラスを通して入れる。

おじいさんの反応はこの節において最も強い。過去の教訓を無視するのは十分悪いが、「生きるどんな人よりニューイングランドの歴史をよく知る」（『有名な昔の人々』）人がそうするのはハッチンソンを情けなくする。彼は文字どおり死んで他の所で埋葬されてニューイングランドの歴史から追放される。

おじいさんの椅子から学ぶのを完全に失敗したハッチンソンが、暴徒の場面の後すぐにそれを無くすのは適当だ。それは次にアンドリュー・オリヴァーが切手の配布からの分離を誓うのを強いられる嵐の日に自由の木の下に現われる。背景はオリヴァー氏が「やつれて、わびしく、土まで謙虚にさせられて」現われるように背景は危険よりも寂しいが天気は再び事件とそろろう。おじいさんはハッチンソンの嘆きに対する反応と著しい対比として「かわいそうなオリヴァー氏」と共感する。「しかしかわいそうなオリヴァー氏にとって悲しい目だった」とおじいさんは所見を述べた。「若き日から、多分王に忠誠で従順であるのは彼の人生の重要な原理だったにちがいな

い。そして今、年をとって、君主の人々が彼の信仰と従順に不平を言うのがわかったことは彼を当惑させ、悩ませたにちがいない。オリヴァー氏はハッチンソンが持った情報と研究の利益が欠けた。おじいさんは従って古い時代において彼自身時間から出ているのが分って共感を分けれる。ハッチンソンと違い、彼は椅子について知らなかった。

印紙条例が1776年に廃止されてから、椅子はそれが「王の友人が呼ばれていたように、「高い保守党员」の幾人かによって絶えず支配されていた「仕事と賑の最中」にブリティッシュ・コーヒー・ハウスに移る。ブリティッシュ・コーヒー・ハウスで椅子は「初期マサチューセッツにおける歴史的 중요性の動く中心」であるため、時代の変化を聴取し続けれる。椅子はほとんど20ページも『自由の木』の活動から外れている。イギリスの集会場所の占領はその背景をおじいさんが次の正式なスケッチ「ボストンの大虐殺」へ次第に導きながら語るボストンのイギリス軍人による占領に平行する。

スケッチは「2、3のわずかな動揺」と偽の火事の警報は「今晚何か奇妙な事件が起こる予感」を持つ群衆の集合を起こした後に始まる。ある瞬間から次の瞬間まででさえも、時代が顕著に変化しようとする時、変化の感覚は明瞭になる。イギリスの兵士とニューイングランド人が衝突し始めるにつれて、物語は変化の正に初めて止められる。

「ああ、なんという危機が今訪れたことか！正にこの瞬間まで、イギリスとアメリカの間の怒りの感情はなだめられたかもしれない。イギリスは和解の手を差し伸べ、これまで権利を誤ったが、もうそうしないと認めさえすれば良い。それから、兄弟愛の古代のつながりは古い時代のように固く接合したようだった。本能のように強く成長した忠誠の週間は全く克服されなかった。植民地の兵士が海の向こうからの仲間と並んで

戦ったのがまだ忘れられないとき古いフランス戦争において危機は共有され、勝利は勝たれた。イギリスはまだ植民地人が故郷と呼んだあの最愛の国だった。ジョージ王はアメリカに眉をひそめたが、まだ父として尊敬された。

しかし、王の兵士がアメリカの血を一滴落としたら、それなら死の苦情だった」

「この瞬間まで」という節の使用はボストン暴動をイギリスとアメリカの関係における転機として指摘して、時間の重要性を強調する。急進的な変化はいったん時が訪れれば一瞬のうちに起これる。アメリカ人は思い出に従い（「共有された危機と勝たれた勝利はまだ忘れられない」）イギリス人が同じようにするかどうかを過去から学ぶ。もしイギリス人がピューリタンと反応から学んだら、2国間の断絶の時は訪れなかっただろう。スケッチが終わるにつれて、イギリスによって流された血は「人々によって忘れられなかったし許されなかった」（その効果ははかなさの境界を横切る。ボストンの大虐殺の流血は1770年の「死に対する口論」の印とそれが起きた瞬間に、歴史の事件と過去の教訓両方だ。

おじいさんによってアルカディア人が初めて追放された時から、アリスが「まじめなため、彼（おじいさん）がこの天上の子どもの心を恐がらせないように物語を柔らめるのを無視した」ので「当惑して恐がる」おじいさんは自分を責める。「ああ、実にかわいそうだ！彼女の天国の性質は地上の罪と暴力の最初の印象を今受けた！それじゃ、クララ彼女をベッドに連れて行って慰めなさい」アリスの「激しいすすり泣き」にかかわらず、おじいさんの反応はアリスの無垢の喪失は必然的なのを示す。結局、地上の罪と暴力を知ることによってのみ彼女は死ぬべき運命を受け入れ彼女自身と人類を理解し始めれるのだ。

次の晩、看護によって多分回復したアリスと一緒に、ロレンスは「おじいさんからの新年の贈り物」である肖像画の本を研究し、顔が「あれらの無常な男の一人によく似合っただろう」「古いピューリタンのそれよりもっと現代的なやり方で、質素な服装の、厳格でいかめしい顔の男の肖像画」を吟味する。肖像画の対象、サミュエル・アダムズはおじいさんによってその中で「古代のピューリタンの一人が最も初期の定住者を区別した同じ専制政治の憎悪をもって人々の心を活気づけるために、古代のピューリタンの一人が地球に戻されたかのように思えた」ような一人だと表現される。別のホーソンの男の錬金術師であるアダムズは古いピューリタンの肉体的で修辭学的な再想像両方において時間の境界を越えた。そして、「沈められた宝」のウィリアム・フィップスのように、アダムズはぼろから富に行った。彼は「わずかな仕事によって生計を立てた」「貧しい男」として始め、その「言葉と文筆がイギリスの国王を王座で震えさせた」一人となる。

アダムズは彼の変身において一人でない。「世に知られずに少年時代と若者時代を過ごした多くのニューイングランド人」はおじいさんが述べるように、「後に最も野心的な夢においてさえも予想できなかった財産を獲得した」

アメリカ合衆国の2番目の大統領で、王座についた王の同等であるジョン・アダムズはかつて学校教師で田舎の弁護士だった。最初の独立宣言書の署名者であるハンコックは、商人と年季を勤めた。後にマサチューセッツの政治家のサミュエル・アダムズは、小さな職人で収める収税吏だった。ワレン将軍は医者で、リンカーン将軍は農夫で、ノックス将軍は製本屋だった。革命軍のワシントンを除いて一番の兵士のナサニエル・グリーン将軍はキューカーで鍛冶屋だった。これらのすべては有名な人となり、アメリカの歴史において忘れられない。

子どもによって尊敬されるべくある男、「アメリカの歴史において忘れてならない」男は永久の変身を経験し、再評価され、型を変更された。

その中で「野蛮な様子の2人の人物」が本当に因習的な市民である次の正式なスケッチにおいて人々はもっと素早く変身し、一時的に働く。イギリスの紅茶の船に対しての行動は「マサチューセッツが見た最も暗い時」を予想する。一般国民から野蛮人への変身の直接の結果は港町から攻囲下の街へのボストンの変身だ。

戦争が近づくにつれて、変化は増す。多数のアメリカ人は直ちに一般市民から兵士に変身するために「瞬間の通告により戦う準備ができる」民兵に変わる。レキシントンの戦いは「革命戦争を始めた一斉攻撃」だった。数分間に起こる一斉攻撃は、平和から戦争へと国をもぎ取る。ボストンの大虐殺と同じく瞬間の行動はロレンスがそれらが起こるやいなや「新しい歴史」と呼ぶものになって、すべてを変える。

この一連の変身は時代の人から時代を超越するアメリカの伝統に進化するワシントン将軍の紹介で最高点に達する。おじいさんは3つの子どものための歴史において他のどの男よりワシントンを尊敬する。ワシントンはアメリカの革命の歴史の因習的な英雄だが、おじいさんによる彼の描写はもっと因習的でない。ここでのワシントンの業績は彼が「常備軍の風にこの田舎の人々の荒い群衆を変身させた」やり方と「少しでも関心を持ったすべての仕事はまるで魔法のようにそれ自体を取り締まるように思えた」様子を含む。おじいさんはそのようにしてワシントンの力は永遠性と現実の型を変更する能力にあると思う。

ケンブリッジの本部にワシントンが到着した少し前に、おじいさんの椅子はブリティッシュ・コーヒー・ハウスから神秘的に消え

(歴史的な重要性はもはやイギリス人と一緒にないという印) 偉大な男が到着するすぐ前にワシントンの本部に再び現われる。椅子を手にして、『歴史のすべて』における最も大きな変身である男から伝説へのワシントンの動きが進める。過去におけるアメリカ人の変身に支えられて、現在において変身を経験しているアダムズ、ハンコック、ウォレン、ノックスとグリーンによって囲まれて、ワシントンはイギリス人を負かし、アメリカの歴史の進路を変え、『自由の木』と『おじいさんの椅子の歴史のすべて』両方の大団円に読者をもたせらる。そのような変化は「ボストンは王がその死の苦悩にいて、(だから) 彼は町の視見を決心し、それを永遠に去る人々の感情を想像する時という、これより興味深い時代を目撃したことがないと思った」おじいさんに興味を持たさずにいられない。おじいさんの関心をとて捕えた歴史の最後の時期はアルカディア人の追放だった。「アルカディア人の追放」の重要性はそのように『自由の木』の最後の歴史的なスケッチから思い出される。

「王党員の暇乞い」において、「王位の下マサチューセッツの司法官長官」であるピーター・オリヴァーは、現在を理解するのに失敗して永遠にアメリカに立つ前に「若い時より親しんだ物に別れの一目」を与える。自由の木のもと誓いを立てるように強いられた弟のアンドリュー・オリヴァーのように、ピーター・オリヴァーは時代によって当惑させられる。「いくつかの束の間の年月がそのような変化をもたらしたのだろうか」変化はもちろん、起ころうとして存在にもっと長く注意を呼んだが、オリヴァーは印を読めずにいる。ボストンにさよならを言うにつれて、「深い愛と激しい後悔が彼の胸に一つの炎になって燃えた」時代を理解しないことにより、ピーター・オリヴァーはどちらも故郷と呼べない2つの国の間の永遠に限界状態に迷う男となった。彼の世界—王位の下—のニューイングラ

ンドーはもはや存在せず、行くべくある国のイギリスは失ったもの
に取って代われない。

オリヴァーと仲間にとってイギリスは代理の家にならないことを
強調するかのよう、オリヴァーはボストンを去るにつれてウィリ
アム・ハウ卿によって出鼻をくじかれ従って「追放されたニューイ
ングランド人が後に傲慢なブリトン人に苦しまされた屈辱の予測」
を持つ。「彼らは自国より誠実に仕えた国にさえも軽蔑された」オリ
ヴァーはどこに所属しどこに留まるのが許されないか明らかにする
ために（英国人のウィリアム・ハウ卿に対して）追放されたニュー
イングランド人だと注意深く確認される。

おじいさんはオリヴァーは1000人のうちの1人の追放人だと子
どもに言い、「本当に不幸な人々ではないだろうか」と聞く。アルカ
ディアの追放人のように、オリヴァーと仲間は時代と変化の力強い
勢力の犠牲者だが、アルカディアの追放人と違い、彼らの物語は子
どもから共感を起こさない。（確かに、通常共感の信頼できる源であ
る小さなアリスはワシントン将軍が椅子をボストンから持ち返った
ら初めて尋ねるのを考えられる）。追放されたニューイングランド
人は別の国に対して忠実だったので、意見がどれ位誠実だったか
にかかわらず、全く選択がなく土地に忠実なままだったアルカディア
人と違い、故意にニューイングランドの岸から追放を覚悟の上で
やった。オリヴァーは悪党としてでなく、アメリカ革命の誤り導か
れた、不運な遭難者として描かれる。子どもはオリヴァーを愛のな
い宇宙に投げたまさにその事件はイギリス人の敗北とアメリカ人の
英雄の勝利という結果になるので彼を哀れめない。

アメリカの歴史の主要な事件が今や過去になったので、椅子は
「詰められたわに、がらがらへびの皮、剥製の鱔、がらがら蛇の皮、
インディアンの矢の束、旧式の火なわ銃、ウインスロップ知事の杖、

老コットン・マザーのかつらとボストンの大虐殺の色のついた印刷物」と一緒に床屋になかば退職した。この歴史的遺物の風変わりな収集の最中に椅子は次の18年間残る。おじいさんは子どもにイギリスの撤退に続き次第に1794年のサミュエル・アダムズの知事としての当選の結果をもたらした事件の素早い種々雑多な物語をする。この当選の後、アダムズは椅子に気付いて「その歴史に詳細な調査をして、どんな優秀で有名な人の連続がそれを占領したか確かめた。(椅子を「よく知る」ことはおじいさんの最も高い敬意だ。)椅子は死ぬまでアダムズのところに残り、それからおじいさん自身に移る。

今椅子の冒険は終わって、「そのすべての歴史を学んだ」ロレンスは「満足でなかった」「ああ椅子が話せたらどんなにいいか！」と彼は叫んだ。「人間とのその長い交際の後—長年世界を答えを探して見た後—黄金の知恵のどんな教訓をそれはつぶやくだろうか！それは人前に出たがらない人にどのように良くて幸せな人生を生きるか—または政治家に国をどのように富裕にするか教えるかもしれない！」おじいさんに教えられて、ロレンスは椅子に歴史の教訓以上のものを要求する。「人間との長い交際」は人に世間でどのように操作したら良いかを教える一つか二つの規則に終わるにちがいない。

ロレンスの願いは『自由の木』の最終スケッチと『おじいさんの椅子の歴史のすべて』の最高点に達するスケッチに道を与える。おじいさんは「寓話に頼る」のを決心し、「子どもにこの物語を本当のものだと誤らないよう警告して」、「名づけて—おじいさんの夢」を語る。「寓話」「物語」「本当の」物語、と「夢」という言葉の使用はおじいさんによる事実と想像の混合とすべての時と場所の完全な現実の強調によってすでに問われた、物語の正直さの区別をぼんやりさせる。もし我々がおじいさんの警告を文学的に読めば、寓話は夢

と物語でありえるが、それは真実の物語でありえない。それでもなぜ我々はこれらの境界を受け入れるべきだろうか。他の境界は『おじいさんの椅子の歴史のすべて』において越えられた。収集を終えるスケッチの真実に関して言えば、聞いて、動いて、種々の場所と人々の重要性を判断する能力に加えて椅子の話す能力について原文を通してヒントが落とされた。従って、椅子が話す前に、読者はこの可能性に対して準備された。子どもは「この物語を真実のものと誤らなければならない」というおじいさんの警告は椅子の発生法上の能力に少なく、恐らくこのスケッチと他のすべてのスケッチの間の大きな違い、人物としての歴史的人物とおじいさん自身の存在の欠如に多く向けられる。たぶんこのスケッチがおじいさんを人物として含むので、誰かが語るまで「真実」でないのは夢、寓話、物語にちがいない。

「おじいさんの夢」の背景は珍しいものの存在を合図する。標準的に活動的な暖炉の火は「小さな炎がその中を踊り、揺れ、妖精のように戯れた重たい燃えさしに砕けた」。過去のスケッチにおいて、炎のふるまいは訪れる事件の指示者だった。ここでは、炎と妖精の比較は魔法を示す。黙想するにつれて炎の中を通常見つめるおじいさんは「もっと深遠に黙想するために、目を閉じた」。眠りと夢の間の縁にいて、おじいさんは時間の境界の外にいてだから椅子に会う適当な場所にいる。

「炎の光の光線」によって助けられて、椅子は生き返って、『おじいさんの椅子』『有名の昔の人々』と『自由な木』に現われた人物の不完全な表をざっと見て、おじいさんと談話を交した他の人の名前を教える。椅子はロレンスが推量したように、その経験から利益を得たので幾つかの機会に歴史的想像力と現実の変わりやすい境界の理解を反映した正しい忠告をした。「コットン・マザーは私といく

つかの会話をして、歴史的回想から大きな利益を引き出した。印紙条令の日々に、私はハッチンソンの耳にささやいて、彼の同国人がどの民族の系統を引くか思い出し、精神が彼等から全く放たれたかどうか考えるように命じた」

良い歴史家なので、おじいさんは椅子の過去の会話に関する記録と伝統の欠如について尋ね、椅子は「唇を開ける最も適当な瞬間」を避ける傾向を指摘する。確かに、それはおじいさんに、その傾向はあまりにも強いので「言葉は当座はかなり強い印象を与えるのだが、聴衆はいつもそれらをただの夢として覚えている」と語る。おじいさん自身、椅子は続ける、は多分翌朝同じ印象を持つだろう。

過去について話し未来に言及した後、椅子は現在にはっきりと関心を示しながら、新しいクッション、上薬の塗り、と継ぎ目の一つの調節を要求する。これらの事柄に注意すると約束した後、おじいさんは、ロレンスによる頼みを故意に言い換えたように、指導のために椅子に訴える。「2世紀以上存在した間、当時最も賢いと尊ばれた人々と親しい交際を持った。多分、包容力のある理解を持つので、知識を教わる貴重な経験をたくさんしただろう。確かに人生のなぞを推測するに十分な時間があった。それならどのようにしたら幸せになれるか我々かわいそうな人間に教えて下さい」おじいさんの言葉使いは明らかにロレンスによる頼みを思い出させる。椅子が話すのを予言するのに失敗したおじいさんがまた自分とロレンスが歴史の正当化を要求しているのを発見したのだろうか。この推量を受け入れることはおじいさんの歴史の理解をロレンスのと同じレベルに置くことを意味する。

椅子の経験（そして従って歴史の学習から）歴史の教訓以上のものを得たいという要求に応えるために、おじいさんは椅子にロレンスの質問をするか子どもにそうしたと言うかのどちらかをする。お

じいさんは、この質問に対する答えをすでに知るかのように見えるだろうが、どんなに簡潔で単純であろうと、答えが椅子自体から来るのを好む。「人事の中に長くいる間」と椅子はとても威厳のある発音を以て言った、「私は常に正義、真実、と愛がすべての幸せな人生の主要な要素だと観察した」。この「危機の前の公理」はおじいさんを驚かすように見え彼は「これは秘密でない。すべての人間はそれを本能的に知る」と主張する。おじいさんの反応は同様に椅子を驚かせ、椅子は「人間と人間、国家と国家の取り引き」から「この最も重要な秘密」が知られているのを推測しなかったし、知るものを語り終えると、さらに話すのを拒否してスケッチを終える。

夢に満足して、子どもは「毎晩新しい夢」を要求する。おじいさんは椅子に似て、拒否して宣言する。「ここでおじいさんの椅子の現実か空想かの歴史が終わる」椅子のように、おじいさんは現在語ろうとしているすべてを語った。子どもはおとなになるにつれより多くの知識を待ち「人生は結末でない」と学ぶのに十分な時間を持つたなければならない。最後の注意または多分将来の歴史物語への手がかりとして、おじいさんは一方は多方と簡単に間違えられるかもしれないというかのように「真実か空想」という言葉を子どもに残す。そして、少なくとも『おじいさんの椅子の歴史のすべて』において、区別は明らかなものでなく、そうなるようにも意味されてない。

この収集のなかで代わりの現実に特権を与えることは時間の境界が厳格さをなくした芸術的な領域を主張する。この場所に到達し 36 才で経済的に苦しんでいる、不成功の作家ナサニエル・ホーソーンから物語の語り手のナサニエル・ホーソーンに変わって、ホーソーンは自分自身が語り手として取って代わられるのを許した。彼はおじいさん—より背が高く、より賢く、より伝統的な像でもって尊敬される人—を代用した。もしおじいさんがホーソーンだった

ら、ホーソーンは全くあの税関の雇い人、あの祖先の失望、あの失望して苦しむ独身者、あの芸術を通して稼げない作家でありえない。

これらの物語におけるおじいさんの権威は物語が力の領域なため、語り手が支配する模型を創る。この力をもって、ホーソーンは変身を完成し、はかなさの限界を逃げ、そして、想像的な権威で固められて、「現実界とお伽の世界との中間地帯となり、「現実」と「想像」とが出会い互に融合する世界」として後に定義するものの位置を突き止めた。彼は『おじいさんの椅子』、『有名な昔の人々』、と『自由の木』が完成されて出版された10年後に『緋文字』への紹介である「税関」を書くまでこの領域を自信をもってそして公然と示さない。これらの子どもの本を書くことにおいて、ホーソーンは現実と空想が混ぜられたところの真実、「子どものための生き生きとして愉快的な物語」を作った真実を確認して理解した。そのような物語を書こうという勤勉で誠実な試みにおいて、ホーソーンは現在の束縛からなんとか抜けてすべての時間と場所の完全な真実に入った。

(本稿は Laffrado, Laura. *Hawthorne's Literature for Children*. Athens and London: The University of Georgia Press, 1992. を参照した。)